

日本体育・スポーツ・健康学会  
体育哲学専門領域

# 会報

Vol.26(4), February, 2023

## 記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 日本体育・スポーツ哲学会報告
- ♪ 定例研究会案内
- ♪ 事務局より
- ♪ 次号予告！

## 巻頭言

### 浅田隆夫先生の「体育原理」と先生の哲学的思考

榊原浩晃（福岡教育大学）

新年になり、巻頭言の草稿に着手することが私の仕事始めとなった。その際、思い出されたことが、浅田隆夫先生の「体育原理」の授業と先生のご研究（学位論文）のことであった。浅田学術奨励賞として、先生のお名前を冠されているので、会員のみなさんは、浅田先生のお名前をご存知のことと思う。私は、学群（学部）2年次に先生の「体育原理」を受講した。「血を流さなければスポーツではな—い（イギリスでは）」などと熱弁を振るわれていた。いわゆる近代初期のイギリスにおけるブラッディ・スポーツ（パブで行われていた動物虐めのスポーツ）のことであった。先生の講義は、「スポーツのもとをただし、その位置づけを探り、現代の体育のあり方に付言できるようにする」という学究的姿勢でおられた。そして、現代の体育の根源であるスポーツがどのように人々の身体的再創造（先生は、身体的レクリエーションと表現されていた）に結びついてきたかを講義されていたことが思い出される。イギリスの体育やスポーツに興味を持ち始めていた私は、先生のご退官に際しての最終講義「社会変動と学校体育の課題」（昭和58年2月）も拝聴したことを覚えている。

「体育原理」は、今日でも教育職員免許法施行規則の備考欄に保健体育の「教科に関する専門的事項」として位置づいている。今日の当該科目の制度・政策上の取扱いは、J.F. Williams の Principle of PE（川村英男訳「体育原理」がある）の文献の内容のように、「体育原理」に関する一般的・包括的内容で構成され、アメリカの影響を受けて戦後の教育改革の中で定着していったものと考えられる。しかし、制度・政策と学術・研究は一致をみていない場合がよくある。浅田先生の「体育原理」の授業においても、「体育原理」の授業内容に加えて、学術・研究の観点から先生の哲学的思考が随所に感じられたことを思い出すのである。

院生になり、イギリス体育史研究をテーマとして選び、先行研究を渉猟するうちに、浅田隆夫先生の学位論文「英国学校体育の成立過程に関する研究」（昭和51年 東京教育大学 教育学博士）が存在することを知った。イギリスの学校体育を研究対象として近代初期から戦後の1945年までの広範囲を取り扱っておられた。スポーツやレクリエーションの根源を探り、それらがいかに人々に浸透したかを、学校体育の歴史的推移と関連づけて論じておられた。人間がどのように生涯を送るのか、その中でスポーツの位置づけと重要性は、哲学的思考なくしては、探究できない。先生は、それらに取り組んでおられたのである。

浅田先生は、多くのイギリス体育の資料を渉猟され、貴重な資料を学位論文で取り扱っておられた。イギリスの体育の学術雑誌として、Physique : Journal of Physical

Education (1890 年刊) があるが、この雑誌は British Library にも所蔵されていないくらい稀有な雑誌である。初巻 (1890 年) には、1889 年アメリカ・ボストンで開催された体育に関する国際会議の報告がいち早く掲載されていた。ピエール・ド・クーベルタンが渡米してイギリススポーツの教育的意義を語った内容も含まれている。浅田先生は、この雑誌記事のすべてを網羅され、学位論文の引用文献に加えられていた。それらのことを私が阿部生雄先生 (イギリス体育史) にお話ししたところ、阿部先生は即座に当該資料をお読みになられ、ご自身の単著に引用されることもあったくらいである。私も再度当該資料を精読し、最終的に学位論文 (「イギリス初等教育の体育授業と課外ゲーム活動に関する歴史的研究」) をまとめ上げることができた。浅田隆夫先生の学位論文とその学術的貢献が、私を含め後の研究者らに役立っていることの証である。浅田先生をはじめ先輩の先生方の哲学的思考を受け止めつつ、これからの体育哲学研究を進めたい。巻頭言を草するにあたり、会員のみなさまのご健勝とご活躍をお祈りする次第である。

榊原浩晃 (hiroakis@fukuoka-edu.ac.jp)

## 体育哲学考

### 「筋肉」について

片淵美穂子 (和歌山大学)

最近、日本語の「筋肉」という用語を調べる機会があった。解剖学や生理学などにおいて現在使用されている医学用語は、18 世紀後半以降、西洋医学が受容された際に翻訳語として創出されたものが多い。「筋肉」もまたそうである。

まず、「筋」と「肉」について、江戸時代の辞書のいくつかを当たってみた。キリシタン宣教師の日本語習得のためにイエズス会が出版した 17 世紀はじめの『日葡辞書』(1603) には、「Sugi スヂ (筋) 筋または、神経」、「Nicu ニク (肉) Xiximura (ししむら) 肉」とある。国語辞書の一つである榎島照武著『和漢合類大節用集』(1698 序)、五巻「肢體」部には、「肉」「筋力」「筋」が掲載され、読みはそれぞれ「ニク」「キンリョク」「スジ」となっている。江戸時代の百科事典と称される寺島良庵『和漢三才図会』(1712) では、「筋 [音は斤] 骨 [音は忽]」の項が立てられ、「筋は {和名は須知} 骨の絡である。骨 {和名は保禰} は肉の核である。筋は肉の力である。竹は植物のなかで筋の多いものである。それで字は竹肉力につくる。肝に属する。骨は腎に属する。」と記述されている。「肉」については、「肉 [和名は之之。俗に爾久という] は肌膚の肉である。膜 [和名はたなしし] は肉の内の薄皮である。」『和漢三才図会』では、「筋」は「骨」と共に説明されている。「筋骨」という表現も江戸時代の武道関連の文献に見ることができ、現在でも「筋骨たくましい」という表現があっても「筋肉たくましい」とは言わないのであり、「筋」と「肉」の繋がりよりは、「筋」と「骨」の繋がりの方が歴史的には古い。

では、日本初の本格的な解剖学の翻訳医学書である杉田玄白『解体新書』(1775) ではどうか。『解体新書』には「第二十八 筋篇」があり、オランダ語の 'spieren' (現代では「筋肉」と訳されるもの) を「筋」としており、『解体新書』においては「筋肉」は一箇所も登場していない。『解体新書』より約 30 年後に出された、西洋の医書を数冊翻訳し要点をまとめ平易に説き、医家の中でかなり出回った宇田川玄真『医範提綱』(1805) における「筋」と「肉」の説明を紹介しておこう。「筋 全軀骨上ニ遍ク布置シ或ハ腔内諸器ニ在テ屈伸運動縮張緩急ヲ主ルノ器ナリ。」「凡ソ肉ト云フハ筋腺、諸臓ノ類総テ柔軟厚實ニシテ塊ヲ為ス者ノ名ナリ。然トモ此篇特ニ肉ト称スルモノハ筋ヲ謂フ。」実は『医範提綱』には、上記以外「肉」という言葉はあまり登場していないが、この記述からは「肉」と「筋」をほぼ同じように捉えようとしていることが伺える。「筋肉」という用語も登場していないが、「筋肉」という表現の出現を予想させる記述である。

成立時期は不明であるが、江戸時代後期の陸舟庵『養生訓』には、「筋肉」が登場してい

る。「人身は運動に利あり，静居に害有，運動すれば能く飲食を消化し血液を健運し筋骨を健固ならしむ，静居すれば筋肉弛緩し血行怠慢し食氣粗慢し操作に懶く寒暑に感し易し」。陸舟庵『養生新語』は解体新書以降の西洋の医学の知見も取り入れている養生書である。「筋骨を健固ならしむ」という表現からは，運動によって「筋骨」が健固になると捉えていることが分かる。続けて「静居すれば筋肉弛緩し」としており，健固になるのは，「筋骨」ではあるが「筋肉」ではない。とはいえ，ここで「筋肉」という概念が登場していることは注目である。

1850年代の養生書には，解剖学的な知識が取り入れられることがあっても筋肉という言葉はあまり見かけないが，1870年以降は登場している。そして解剖学的な説明は，政治的な意識と結びつくこととなる。この時，脳の重要性，神経，筋肉の関係が鍵となる。斎藤隆哉編『養生談』（1878）はこう述べている。「脳の効用たるや人體百般官能皆主宰する所譬えは政府の人民に居て政令を四陲に及ぼすか如し」。「脳は君，神経は臣，筋肉は人民なり」。脳から神経を通して筋肉に伝達され，「筋肉」が動きや運動をもたらすという図式は，明治期の政治システムを喩えとして語られるようになっていく。

片渕美穂子 (mkata@wakayama-u.ac.jp)

## 書籍紹介

友添秀則「わが国の体育・スポーツの系譜と課題」（大修館店，2022年）

細越淳二（国士館大学）

日本体育学会が日本体育・スポーツ・健康学会と学会の名称を変更してから2年が経とうとしています。この名称変更の背景には，“体育なるもの”と“スポーツなるもの”の有り様とその学問的位置付けや社会におけるこれらの見通しの整理があったと受け止めています。変化の激しい現代にあって，体育は何を目指し，スポーツは何を求めていけばよいのでしょうか。また，それぞれどのような基盤をもちながら発展を志せばよいのでしょうか。いま学校体育は，多様な個性や特性をもつ子どもたちが共に運動に親しみ，運動を介して多くの成長を得ることができるよう，学習の考え方そのものに加えて，その内容や方法の面で課題が指摘されています。スポーツにおいては，ドーピングや悪しき商業主義等の問題によって，スポーツ・インテグリティが危機に直面していると言われ，スポーツ自体とスポーツを取り巻く問題についての再検討が社会的な問題になっています。学会の名称変更が示す通り，私たちは今，これまでの歴史的経緯を振り返りつつ，これからを見据えていく岐路に立っているのだと思います。

著者の友添秀則氏は本書を通して，わが国の体育・スポーツに多大な影響を与えた嘉納治五郎の思想や取り組みを振り返り，批判的に考察することで，標題にある『わが国の体育・スポーツの系譜と課題』に迫り，これからの体育・スポーツを形づくるための議論の契機を提供しようとしています。

本書ではまず，嘉納治五郎が「人間形成」「人格陶冶」を重要視しつつ「東西の文化複合の産物」として柔道を位置付けたこと，体育においてもこの価値観を大切に東京高等師範学校での教えをもとに，わが国の学校体育，スポーツの制度的・思想的基盤形成に大きな影響を及ぼしたことを示すとともに，この思想が現在のわが国の体育・スポーツ観や体育・スポーツ論に脈々と現在まで受け継がれていることについて説明しています。著者はここで，スポーツ自体がもつ内在的価値以上に外在的価値を第一義とするこの構造が，どのような経緯をもって形成されてきたのかを論点一つに掲げ，史実をもとに解説・解釈しています。

それに続いて（これが本書の大きな見所になっていると筆者は考えますが），嘉納の教えの限界とそこに見られる問題性を提示した岡部平太の思想や行動を取り上げて，岡部がなぜ嘉納に異を唱えたのか，岡部は何を見て何を目指すようになったのか等について考察しています。岡部の取り組みの一端を本書から抜き出してみると，例えば1920年，アメリカ留学

から帰国した岡部は、いまだ日本泳法で競技を行っていた大日本水上競技連盟に対して近代泳法の利点を説明するけれども聞き入れられませんでした。そのため、留学で学んだ方法で選手を指導して極東選手権で優勝させるなど、当時のセオリーや慣習を打ち破るような理論と指導実践を展開しました。当時、日本の水泳競技の発展に尽力した朝日新聞社の田畑政治は、ある寄稿の中で岡部のことを「スポーツ界の反逆者でもあり天才でもあった」と表現するほどだったといえます。体育やスポーツの本来的な価値を「運動そのものの快や楽しさや生の悦びにある」と説いた岡部の思想は嘉納とは相容れず、岡部は満州に活動の場を移すこととなりますが、本書では、この岡部の言動や記述等をもとにして、今後のわが国の体育、スポーツの在り方を検討する契機が提供されているといえます。

わが国の学校体育・スポーツ振興に深く関わってきた著者の言葉で言えば、「『生の悦び』『楽しさ』というスポーツそれ自体に内在する本質的な価値と、人格陶冶という人間形成的価値を同時に実現可能とする日本発の強靱な体育・スポーツ観／論やスポーツのあり方を構築する」ために、いまあらためて嘉納治五郎（カノウイズム）に目を向けることの意義を示した一冊だといえるでしょう。

細越淳二 (hosogoe@kokushikan.ac.jp)

## 書籍紹介

### 中村高康「暴走する能力主義—教育と現代社会の病—」

(ちくま新書, 2018年)

伊佐野龍司 (日本大学)

筆者が何かしらの「能力」に関する話題に触れない日はない。例えば、教職課程科目の保健体育科教育法では、2017年に告示された学習指導案要領が、「何ができるようになるのか」という観点から、3つの柱（知識及び技能・思考力・判断力・表現力等・学びに向かう力、人間性等）からなる「資質・能力」の育成を目指していることを触れている。また、本学では例年1月末から作成する次年度のシラバス（授業計画）に、授業内容とディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施の方針）との関連を記すこととなっている。なお、ここには中央教育審議会が、前者を大学卒業時まで学生が身に付ける「資質・能力」、後者を前者の達成に向けた「教育課程の編成及び実施の在り方等」を示すものとして位置付け、2つのポリシーの一体性・整合性を求めている背景がある。その他にも、担当する初年次教育科目では、卒業後を見据えた「社会人基礎力」を取り上げ、授業内容との関連について言及している。このように筆者は、予測困難な時代を生き抜くための「能力」の育成を推し進めようとする政策の渦中にいる。

本書は、上述の様々な能力に関する論議を「これからの時代に必要な『新しい能力』を先取りし、それを今後求めていこうとする言説の集まり」(p. 24) と示した上で、能力に傾倒する議論こそ現代社会の特性の一つであると主張する。それゆえ、「今、人々が渴望しているのは、『新しい能力を求めなければならない』という議論それ自体である」(p. 24) との立場から論理が展開される。この渴望が生まれる仕組みを本書は「メリトクラシー（能力主義として示される）の再帰性」の概念を示して論証する。つまり、メリトクラシーには、常に反省的に問い直され、批判される性質が組み込まれているという (p. 51)。それというのも、社会的に求められる能力が、抽象的であるため厳密に測定することが困難（第2章）であり、能力の判断基準の決定は社会的文脈に委ねられるという社会構成的性格を有している（第3章）ためである。このように本書は、メリトクラシーに暫定性と構成性が内在することを詳らかにし（第4章）、後期近代社会では、教育拡大と情報化の進展によって従来用いられてきた能力指標の信頼性が揺らぐことで、再起的なまなざしが一層高まると論じられている（第5章）。教育学領域を見るとメリトクラシーに関する論文・著書は数多く示されるが、本書は、メリトクラシー自体に再帰性が内在的特性として備えていることを論証した

点で他の論考と差別化される。

しかしながら、この理論的枠組みの価値が広く伝わることに對して、本書は悲觀的に捉えている (p. 218)。それほどまでに、現代社会は、能力の实在性・絶対性を前提とした議論がメインストリームになっている。こうしてメリトクラシーの再帰性を作動する要因が高められるほど、人々に対して不安を煽り「新しい能力」を求めていくことになるのである。そのため、この「能力主義の暴走」ともいえる現状においては、新しさの追求より、むしろ、そこから距離を取り、修正を加えていくという慎重な姿勢が求められている (p. 237)。

冒頭に示した例も無自覚的に推し進めては、ひとつの見方の正当性を下支えし、再帰性の作動を後押しすることになる。本書の視座は、教育政策の渦中にある現状を俯瞰的に捉えることを可能にし、自らの立ち位置を顕在化させることに貢献する。そこでは、様々な能力に触れることになろうとも、「なぜ、この能力なのか」「この能力は何を意味するのか」等々、渴望とは一線を欠いた能力論議になろう。

もちろん、本書は教育学領域に限らず、広く能力に関わる領域において有用な一冊である。体育・スポーツ領域に携わるわれわれにも「能力とは何か」と改めて向き合う機会を提供するのではないか。

伊佐野龍司 (isano.ryouji@nihon-u.ac.jp)

## 私の研究

### スポーツ根性論から主体形成・変容へ

岡部 祐介 (関東学院大学)

筆者はこれまでスポーツにおける勝敗をめぐる指摘されてきた問題と向き合いながら、卓越・勝利の追求という実践を支える精神性とはどのようなものか、スポーツ根性論を主たる対象として考究してきた。

研究の出発点となったのは、長距離走者・円谷幸吉を知ったことである。円谷は、1964年の東京オリンピックにおけるマラソン競技で銅メダルを獲得し、メイン会場であった国立競技場に唯一日の丸を掲げた。その後競技では不振に陥り、1968年のメキシコオリンピック開催を前に自死した競技者であり、スポーツの内外で大きな波紋を呼んだ。その円谷の事績に着目し、現代のスポーツおよび競技者にとっての円谷の自死の意味を、1) 競技者が背負う「精神的な重圧・社会的な圧力」を鮮明化する契機、2) スポーツ観の変容を促す「組み換え装置 (カウンターパート)」として読み取ることができた。

上述の円谷の世代において支配的なスポーツ観としてスポーツ根性論が挙げられた。次の研究課題として、このスポーツ根性論の成立と流行について、根性という言葉の意味使用の変容に着目しながら考察していった。スポーツにおける根性とは、目標的な要素としての卓越・勝利、方法的な要素としてのハードトレーニング・猛練習によって培われる意志や精神力のことであった。それが社会全般の雰囲気にも影響し、危機や困難な課題に対して粘り強く継続した取り組みによって克服し、打開することの意味へと読み換えられた。スポーツにおいて勝利を追求するということが、日本社会全体の状況に重ねてとらえられ、業績主義・能力主義の社会を強固に形成していったと考えた。

スポーツ根性論は、流行とともにその弊害も指摘されていた。1964年の東京オリンピック以降にスポーツが大衆化していくなかで、スポーツ根性論は勝利至上主義を正当化する理念として効力を発揮し、しごきや暴力をともなった指導や受動的な忍従をもたらしたと考えた。スポーツ根性論は、勝利至上主義的な風潮のもと、徹底した競争や勝利の追求のなかで閉塞状況に置かれた際に、競技空間からの離脱や中断・切断を規制し、継続・接続を促すコードとして機能すると考えた。

また、スポーツ根性論が支配的なスポーツ観として機能していった時期に重要な事績を残した指導者にも着目した。それは、女子バレーボールチーム「東洋の魔女」を率いて世界選

手権および東京オリンピックで優勝した大松博文である。彼の指導哲学・信念である「大松イズム」について検討し、スポーツ根性論の流行との関係の明確化を試みた。「大松イズム」とは、戦争体験を特筆するものとした彼の人生（観）をもとにして編み上げられたものであり、選手たちとの共感的な信頼関係が形成されたうえで、指導方法や技術、戦術に対して目的合理性および創造性を動員し、ハードトレーニングという自己鍛錬の重要性を説く指導哲学・信念であった。

大松は、選手の自己教育・自己形成という側面を重視し、主体的なハードトレーニング・自己鍛錬を強調していた。大松が為したことは、「東洋の魔女」たちのそれぞれの特性を把握し、それぞれに合った指導方法を考え、「率先垂範」を念頭に置き、常に彼女たちとともに実践することであった。大松は、自分自身に打ち勝つための、つまり克己のための日々の修養が「ハードトレーニング」であり、それによって根性が養われると考えた。

上述のことから、スポーツ根性論や大松イズムでは、スポーツの実践を通じた主体形成・変容が重要視されていたと考えてよいだろう。それは特に、主体が自己を形成していく実践（ミシェル・フーコー（廣瀬浩司・原和之訳）、『主体の解釈学』、筑摩書房、2004）として捉えることができる。ここに、スポーツ根性論から自己形成論・修養論への接続の可能性が見いだされた。

今後は、修養をはじめとした自己形成の思想とスポーツにおける実践・トレーニングをどのように関係づけられるのか、スポーツにおける日常的な実践としてのトレーニングと主体の形成・変容について考究していきたい。

岡部祐介 (yokabe@kanto-gakuin.ac.jp)

## 日本体育・スポーツ

### 哲学会報告

## 日本体育・スポーツ哲学会第44回大会報告

森田啓之（兵庫教育大学）

令和4年8月18（土）・19（日）の二日間、神戸市中央区の兵庫県学校厚生会館を会場として3年ぶりに対面で学会大会が開催されました。私は実行委員長として大会運営をさせてもらいました関係で、以下、報告をさせていただきます。

初日午後は、近藤会長による挨拶を皮切りに、隣り合わせの2会場を使用して、一般研究発表が5演題ずつ同時進行で行われました。その後は、佐良土先生（日本体育大学）・高橋先生（長崎大学）の司会・進行により、「スポーツコーチングを哲学する（1年目）—コーチングに潜む哲学的課題—」というテーマでシンポジウムが行われました。新たなコーチ養成制度に携わっている小谷先生（流通経済大学）、ハンドボールにおけるジュニア育成に取り組まれている中山先生（筑波大学）、そしてフィギュアスケートの競技者でもあり、コーチでもある町田先生（國學院大学）からそれぞれの実践に潜む課題を語っていただきました。その後のフロアとのやり取りを含めて、次年度につながるいくつかの課題が明確になり、来年度大会での2年目が楽しみなシンポジウムとなりました。

二日目の午前中は、再び一般研究発表が3演題ずつ行われ、その後は台湾（National Taiwan Normal University）からお越しいただいたChien Ju Tang先生に「Know yourself through your body」と題する基調講演をいただきました。これまで互いを行き来して研究交流を深めてきた本学会ですが、コロナ感染症が拡大して以降、数年ぶりに海外の先生を神戸にお招きできたことはうれしい限りでした。さらに、午前中最後の総会では、昨年度の事業や決算の報告、並びに今年度事業について審議がなされ、滞りなく承認されるとともに、新役員が紹介されました。最後に、昼食を挟んだ午後の最終セッションでは6演題の一般研究発表が行われました。

ここまでプログラムについて概略説明をしてきましたが、学会大会の「華」は一般研究発表であると思われます。最終的に発表された21演題では、身体表現や身体的経験、スポーツの概念やスポーツ文化論、キャリア教育、さらにはスポーツ倫理的諸課題にと多様な 키워

ードが並びましたが、特に学校体育現場からの実践的研究が複数あったことは、本学会の趣旨でもある「体育・スポーツ実践への貢献」という点でうれしく感じた次第です。なお、参加者が最優秀と判断した一般研究発表に対して大会実行委員長名で表彰を行う「ベストプレゼンテーション賞」には、佐藤先生（明星大学）・坂本先生（筑波大学）による「スポーツ概念の更新に向けた予備的考察」が選ばれましたことを、ここに報告しておきます。

一方、対面での学会大会開催で多くの参加者が楽しみにし、かつ有意義なものが、初日夕方以降のプログラム!?です。実行委員長として、この情報交換の場を神戸ならではの会場と、当初は着々と予定・準備していましたが、開催1ヶ月前あたりから全国的に感染者数が増加し始め、残念ながら開催の中止を決定しました。ただ、二日目に参加された方々のお話からは、個人的に有志数名で集まり久しぶりにドリンクを媒介にした哲学的議論が多くなされたことを聞くことができ、オフィシャルな情報交換会はできなかったものの、学会大会自体を対面で実施できてよかった（成果でもある）と、実行委員長としてホッと胸を撫で下ろした次第です。

さて、来年度の第45回大会は伝統ある日本体育大学において今年度と同様な時期に開催されます。是非ともご予定下さいませ。約半年後の東京において、より充実した研究発表やシンポジウム等が行われることを期待するとともに、最後になりますが、今学会大会開催にあたり大変お世話になりました大会担当理事の田中先生（明星大学）・高橋先生（長崎大学）、そして神戸にお越しいただいた参加者の皆様にお礼を申し上げつつ、報告とさせていただきます。

森田啓之（hmorita@hyogo-u.ac.jp）

## 定例研究会

### 体育哲学専門領域 第3回定例研究会（案内）

森田 啓（大阪体育大学）

日 程：2023年3月4日（土）15：15～18：00

開催方法：オンライン（Zoom）

注意事項：オンライン配信の閲覧情報はメーリングリストで配信します。メーリングリストへの登録をお願いします。会員以外が閲覧する場合は、会員から研究担当にご連絡ください。また参加者は当日実施する出席調査（Google Forms）に記入をお願いします。

#### 【プログラム】

15：15 代表挨拶 関根 正美（日本体育大学）

#### 【学位論文発表】

座長：関根 正美（日本体育大学）

15：20 研究発表① 唐澤 あゆみ（日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程）

第32回オリンピック競技大会（2020/東京）における国際オリンピック委員会の諸活動に対する批判と評価：「オリンピズム」と「オリンピック・ムーブメント」の視点からの検討を通して

16：00 休憩（5分）

座長：坂本 拓弥（筑波大学）

16：05 研究発表② 中野 大希（筑波大学大学院博士前期課程）

体育授業における痛みの経験の現象学的考察：身体と世界の関係に着目して

16：45 休憩（10分）

座長：深澤 浩洋（筑波大学）

16：55 研究発表③ 劉 展羽（筑波大学大学院博士後期課程）

中国武術の特質およびその方向性に関する思想的研究：

天人相関の中で生命哲学を実践する内向超越の功夫  
17:55 副代表挨拶 深澤 浩洋 (筑波大学)  
研究発表①, ②: 発表, 質疑合わせて 40 分  
研究発表③ : 発表, 質疑合わせて 60 分

**【発表者氏名, タイトル, 概要】**

唐澤 あゆみ (日本体育大学大学院体育科学研究科博士前期課程)

第 32 回オリンピック競技大会(2020/東京)における国際オリンピック委員会の諸活動に対する批判と評価: 「オリンピズム」と「オリンピック・ムーブメント」の視点からの検討を通して

**【概要】**

本研究の目的は, 2020 年東京オリンピックにおける IOC の諸活動を, 「オリンピズム」と「オリンピック・ムーブメント」の観点から批判・評価することである. 新型コロナの緊急事態宣言下での開催となった 2020 年東京オリンピックに対しては, 数多くの批判がなされてきた. しかし, 2020 年東京オリンピックに対する批判や評価が新型コロナの問題に収斂されるならば, その批判や評価は IOC や近代オリンピックが抱えている潜在的な問題を見逃してしまう可能性があるだろう. 本研究は, 2020 年東京オリンピックに向けて IOC によって遂行された諸活動を「オリンピズム」と「オリンピック・ムーブメント」の観点から批判・評価したうえで, 新たな視点を提示することを試みたい.

中野 大希 (筑波大学大学院博士前期課程)

体育授業における痛みの経験の現象学的考察: 身体と世界の関係に着目して

**【概要】**

本修士論文の目的は, 体育授業における痛みが児童・生徒にとって有している意味を明らかにすることである. 先行研究では, その意味が十分に論じられてこなかった. そのため本修士論文では, 現象学的身体論を手がかりに, 痛みが, 生きられた世界としての体育授業とその世界に生きる児童・生徒の身体とをどのように変容させるのかについて検討する. それによって, 痛みの経験が事物や他者とのかかわりを支えていることを明示したい.

劉 展羽 (筑波大学大学院博士後期課程)

中国武術の特質およびその方向性に関する思想的研究: 天人相関の中で生命哲学を実践する内向超越の功夫

**【概要】**

中国武術とは何か. それは何を安心立命の根本とし, 「どこ」へ向かうのか. なぜ「中国武術」と呼べるのか. また, 功夫 (kung fu) は中国武術のグローバルな一般総称として広まっているものの, 功夫とは何か, 「中国武術は功夫である」は一体何を伝えているのか, 人間性または人間社会におけるその意義や価値は何なのか. 本博士論文では「中国哲学思想」という人文的土壌の中で「中国武術」の本来性に立ち返り, その特質および特質を基盤とする中国武術の方向性を解明した.

**【問い合わせ先: 体育哲学専門領域 研究担当】**

森田 啓 hirakumorita@ouhs.ac.jp

高橋 徹 t.takahashi@okayama-u.ac.jp



## 事務局より

田井健太郎（群馬大学）

### ○ 2023 年度学会大会について

来年度の学会大会（同志社大学：2023年8月30日～9月1日）につきまして、詳細は3月の学会理事会にて決定予定となっております。

### ○ 住所等変更及びメーリングリストについて

異動等により、所属先や住所等、会員情報に変更があった方は、一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会事務局（<https://taiiku-gakkai.or.jp/admission>）にご連絡ください。会員情報は専門領域の名簿と連動しております。

また、専門領域メーリングリスト（[talk@pdpe.jp](mailto:talk@pdpe.jp)）に登録いただきますと、電子メールによって会報が配信されます。速報性、経済性、専門領域活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。学会を退会された際には、メーリングリストより削除いたしますので事務局までご連絡下さい。専門領域メーリングリストに関しては、事務局（[bureau@pdpe.jp](mailto:bureau@pdpe.jp)）までご一報ください。

### ○ e事典構想について

2022年度総会において本領域におけるe事典構想が報告され、活動が始まっております。今後、会員の皆様に執筆を依頼してまいります。ご支援をお願い申し上げます。

## 次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は、広報担当：釜崎（[kamasaki@meiji.ac.jp](mailto:kamasaki@meiji.ac.jp)）までお問い合わせ下さい。

### 体育哲学専門領域会報第26巻第4号

発行者 日本体育・スポーツ・健康学会

体育哲学専門領域

関根正美（代表）

編集者 石垣 健二、田中 愛、釜崎 太（広報担当）

発行日 令和5年2月1日

連絡先 〒371-8510

群馬県前橋市荒牧町4丁目2番地

群馬大学共同教育学部 田井健太郎 気付

電話：027-220-7326

### 【編集後記】

今回の会報は、「歴史」というテーマを中心に執筆依頼をいたしました。故浅田先生のイギリス話、筋肉や根性の話、はたまた嘉納治五郎の時代から現代のメリトクラシーの時代まで、多岐にわたってとても深い内容になっていると自負しております。やはり哲学と歴史は切っても切れない関係、昨今の軽薄な時代とは別の世界を垣間見させていただけました。執筆いただきました先生方、本当に有り難うございました。

そんな軽薄な時代をよそ目に、真摯に研究に向かうことが、よりよき時代につながることを切に願います。自分自身に言い聞かせながら… (I)